CHANGEの仕方

桜もち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＨＡＮＧＥの仕方

【Ｎコード】
Ｎ２８５８Ｐ

【作者名】
桜もち

【あらすじ】
主人公の奈津は、毎日病院通いの友達の付き添いをしている男の子に恋をしていた。名前も知らない彼に会いたくて、毎日病院近くの公園に通う。
そんな毎日を送っていたある日、奈津は自分しか見えないという８才の男の子と出会う。
そこから４人の運命が少しずつ変化していくーーー。

初めての作品です。至らないところがたくさんあると思いますが、

よろしくお願い致します。

始まり

あの日はとても暑い日だった。
暑くてイライラしていた。
そんな時、最悪な出来事が起きた。

「兄ちゃんなんか嫌いだぁ。」

「俺もお前なんか嫌いだ。いなくなっちまえよ！」

「・・・・兄ちゃんのばかぁ！！」

キィィィィィ！！！！！ドン！！！！！

「ぁぁぁぁぁあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

高校2年の夏、私は恋をしていた。

「奈津ー！！今日も一目惚れの王子様に会いに行くのー！？」
「うん！！早く行かないと会えないかもしれないから行くね。バイバーイ！」

その頃の私は学校が終わるとすぐに荷物をまとめ、とある公園に走ってかよっていた。
その公園は大学病院の比較的近くにあって、普段はそこで入院している患者さんがよく利用している。だが、病院近くと言っても少し歩かないといけないその場所は、夕方に近づいてくるとだんだんと人が減ってくる所だった。
けれど、、、

「ハァ、ハァ。。。まだいるかなぁ。・・・・居たぁ！」

その人が少なくなってきている中で、いつもこの時間にベンチに座って本を読んでいる人がいた。
それが私の「一目惚れの王子様」だった。
私は彼の座っているベンチの端っこに座り、かばんの中から本を取り出す。言葉を交わしたことはないけれど、本を読むふりをしながら過ごすこの少しの時間は、私にとって憩いの時間だ。あっ、ふりって言っても彼を見習ってちゃんと読もうとはしてるんだよ？でもね、どうしても隣が気になって気になってページが進まないという・・・しょうがないよね！！うん！！
さっきも言ったとおり、一目惚れのうえ、声をかける勇気もなく、そのため彼のことは何も知らない。
ただ容姿が、色白で、瞳が茶色がかっているのに合わせてか、髪は

少し長めのシックなブラウン。整った顔立ちだがとても優しい雰囲気を持っている。まさに私の理想の王子様！！っていうのは確かなのよ、うん。

そんなひとときの幸せに浸っていると、その時間を終わらせる人物がやってきた。

幸せの時間（とき）からどん底へ

「透ー！！」

名前を呼びながら、病院側から1人の男の人がこちらに近づいてきた。それと同時にベンチに座っていた王子様も本を閉じ立ち上がる。

「遥。」

「ごめん。いつもより遅くなった。」

「いいよ。その分読書進んだしね。」

透さん・・・なんて優しそうで素敵なお名前・・・！！帰ったら王子様プロフィール更新シなくちゃ！！・・・でも2人の時間はもう終わりかぁ。ハァ。

「ねぇ。」

でもでも、また会えるしね！！（話せないけど）

「ねぇってば。」

あっ、プロフィール、今日透さんが読んでた本のタイトルも書かなくちゃ。えっとえっと、名前なんだったっけ？まだ透さん、本手に持ってるかな？

そう思い、私は2人のいる方向を見ようと振り返った。すると、

「おい！」

透さんじゃない方の人（※遥さん）の顔の度アップが、

「・・きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

目の前にあった。思わず叫びながら後ずさる。すると彼は手を耳に当てながら、

「でけぇ声。何も叫ぶことないだろ。」

「だっ、だって、いきなり顔がっ、目の前にっ！！」

「いきなりじゃねぇよ。何度も読んだし。」

「・・へっ？」

見かねた透さんが話の中に入る。

「言葉がぶっきらぼうでごめんね。君が読んでた本が落ちてたから、遥が拾って声をかけたんだ。」

「あっ、そうだったんですね。すみません、ありがとうございます。」

そう言って、遥から本を受け取る。

やだなぁ、私ったら恥ずかしい・・。思わず顔が赤くなる。

恥ずかしさでいっぱいになり、少し沈黙がおこる。すると、

「もしかして・・俺に一目惚れしちゃった？」

「なっ・・！！」

遥が意地悪そうに口の端を上げながら言った。

「ちっ、違います！！」

「やっぱりなぁ。俺かっこいいし。そうなっても仕方がない、うん。」

「だから違いますって！！」

あああぁぁぁ～～、透さん隣にいるのに勘違いされちゃうよぉ～！！
そんなことを考えているのを知ってか知らずか、遥さんは一瞬私を上から下まで見ると、次に肩に手を置き、

「でもごめんな。もうちょっと体が成長してからもう一度告白しに来いよな。」

そう言い放った。

・・・・・・・・・・・・・・・・ブチっ。

「こんのセクハラがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

堪忍袋の緒が切れた私は、気がつけば遥さんの顔面を殴り飛ばしていた。思いっきりグーで。

ハァハァ・・・。
「なんで！初めて話した！ほぼ初対面の人に！そこまで言われなくちゃいけないのよ！！」

どうしよう、泣きそう。せっかく透さんの名前が知れて、今日は良い日だって思ってたのに。・・泣き顔・・見られたくない。
そう思った私は、そのまま何も言わず走り去った。

少し走ったところで、透さんが追いかけて来ているのが分かった。

「待って！！」

そう言われ、渋々背を向けたまま立ち止まる。

「あの、ごめん。」

「・・あなたが謝る必要ないじゃないですか。」

「そうなんだけど、でもあいつの親友として、ごめん。」

「・・・・。」

「・・・明日も公園に来てくれるよね？」

「・・分かりません。」

「俺、待ってるから。」

「・・・・。」

「じゃあ、また明日。」

透さんはそう言うと、もと来た道へと帰って行った。

彼が歩いて行く後ろ姿をしばらく見つめ続ける。

行きたいよ。透さんに会いたいもん。でもこんなことがあったあとじゃ、

「・・・・・行けるわけ・・ないじゃん。」

思わず呟いた独り言。このまま風の中に消えていくはずだった。

なのに、

「なんで？」
「えっ？」

それに返事が返ってくるなんて、思いもしなかった。

しかもその出会いが、私の運命をここから大きく変えていくことになろうとは、このときの私には想像もできていなかった。

「遥、今のは本当に失礼だよ。」

そのころ透は遥の元に戻っていた。すると遥はバツが悪そうに、

「・・・分かってる。言いすぎた。」

「明日も来てねとは言ったから、明日彼女が来たらちゃんと謝るんだよ？」

「・・・あぁ。」

そう答えた瞬間少し苦しげな表情をした遥を、透は優しく見つめていた。

一方戻って、奈津の方はというと・・・

「誰！？」

小さく呟いた独り言。誰もいないはずなのに返事が返ってきた。奈

津は慎重にまわりをぐるっと見回した。・・・が、誰もいない。

「気のせいだったのかな？」

そう思い、帰ろうとした。

すると、

「ここにいるよ。ここ、ここ。」

頭上から声が聞こえた。

えっ、まさか、ありえない・・・・。そう思いながらも上を見上げる。するとそこには小学生くらいの男の子が頭を下にして宙に浮いていた。

「ゆっ、ゆっ、幽霊いいいいいいいいいい！！！？？？」

ありえないありえないありえない！！私霊感ないし、見たくないし、これから美人霊感少女なんて呼ばれちゃって有名人になっちゃったりして、えへへ・・でもそしたら透さんが気味悪がって遠のいちゃうかも！？それはいやだぁぁぁぁ！！

そんなことを瞬時に考えながら、奈津は叫びながら後ずさりした。

「お姉ちゃん、ご名答。でもそんなに後ろまで後ずさらなくてもいいじゃん。」

そんな様子に苦笑いしながら男の子は宙に浮いたままこちらに近づいてきた。

「こっ、来ないでよぅ！！」

思わず目をつぶる。

「そんなに怖がらないでよ。何もしないし。」

「・・・本当？」

「本当、本当。」

そう言われ、そっと目を開けた。男の子は両手をパアにして顔の高さぐらいまで上げ、

「ねっ？何もしてないでしょ？」

とニコッと笑いながら答えた。

「う・・・うん。」

なんとかちょっとずつ気持ちも落ち着いてきた。・・・でもそうなると色々疑問が浮かんできたぞ？なんで今まで幽霊が見えなかった私がいきなり見えるようになったの？しかもどうしてこの時点？呪われたりしない？

もんもんと考えていると、その間の沈黙が耐えられなかったのか、男の子が話を切り出した。

「あのさ、さっそくなんだけど、お姉ちゃんにお願いがあるんだ。」

「お願い？」

「うん。僕のお兄ちゃんに僕の言葉を伝えてほしいんだ。」

お願い事

次の日、学校の中庭で奈津は1人悩んでいた。

「どうしよう。昨日の今日だし、行くのやめておこうかなぁ。」

「えー、行こうよ。約束したじゃん。」

「・・まだ約束したわけじゃないし。」

それは昨日の夜までさかのぼる。

この宙に浮いている男の子と出会ったのは夕方頃。しかし夜に近づくにつれて人気がなくなるその場所は危険なため、幽霊を連れていくのは少し抵抗もあったが、一旦自分の家に帰ることにした。

その途中、

「なんでこんなことに・・・。」

今日のことを思い返しながら、思わずつぶやいてしまう。

「俺もわかんない。」

「わかんないって。」

「ほかの人には今まで一切見えたことなかったから。あっ、名前言ってなかったけど、俺、一枝（いちえだ）彰（あきら）、１０歳。一枝　遥の弟だよ。」

そう言いながら彰はぺこりとお辞儀をしたあとピースをした。それ

につられ奈津もお辞儀とピースをしながら答えた。

「あっ、それはご丁寧に御兄弟の名前まで。私は奈津。片桐（かたぎりなつ）奈津。花盛りな高校2年生よ。」

・・・？？ちょっと待って？

思わず歩いていた足を止め、彰の方に向き直る。

「・・・・・・・・・・・・って今、遥って言った？遥ってもしかして昨日会った超失礼な・・・？」

「そうそう。奈津が昨日会っていた、背が高くて、色黒で、スポーツ万能で、顔もかっこ良すぎる俺の兄ちゃん！！」

彰は目をキラキラさせながら答える。

「ちょっ、色々突っ込みどころ満載だけど、それは一旦置いといて・・・もしかしてもしかしなくてもあいつに言いたいことがあるわけ！？」

「うん、そう！」

「いや。」

「えっ！？」

「絶対いや！もうあいつと話したくもない。あんな失礼なやつ。」

あんなやつ、もう二度と会いたくない。

「兄ちゃんは口は悪いけど、優しいから今頃は絶対後悔してるよ。」

「・・・どうだか。」

「明日会ったら分かるよ、絶対。」

自信に満ちた顔で、彰は奈津に言った。あまりにも自信たっぷりな

言い方に、思わずため息が漏れる。

「・・ふぅ。さすがあいつの弟だね。兄のことよく分かってらっしゃる。」

「自慢の弟だろ？」

いかにもフフンッと言うように透は両手を腰にあてた。

「負けた。・・・分かったよ。彰君のお願い事、聞いてあげる。」

そう言った瞬間、彼はとびっきりの笑顔を見せてくれた。

戻って今日

そして今に至る。

「なっ？昨日ちゃんと約束してるじゃん。」

「うーん・・・。」

奈津は昨日の約束を思い出しつつも、微妙な返事をする。

だってなぁ、昨日の今日であいつに会わなくちゃいけないなんて。

「だからちゃーんと今日も行ってよね。」

でも「いいよ」って言ったあとから彰君、うれしさでかずっとそわそわしてるんだよね。

それを見ていると、こっちまで笑顔になって、ついつい自分の意思が揺らいでいく。生意気なのがたまに傷だけど。

「おい、奈津。聞いてるのかよ？」

ハッと彰の方を見ると、ふくれっ面で奈津を見ていた。

「聞いてる、聞いてる。ちゃんと行くって。」

そう言うと彰はホッとした顔をした。

「そういえば聞いてなかったんだけど、あの人に会って何を言うの？」

「それは・・・そのときに奈津に直接言う。」

奈津はその言葉にまた疑問を感じ、

「どうして？」

と聞いてみた。すると、

「どうしても。」

と背中を向けて、そのまま黙ってしまった。それに対して言葉をかけようとした瞬間、チャイムの音がなった。その音を聞いて、渋々話しかけるのを止め、教室に戻ることにした。

そして今日

放課後。

「さぁ、奈津。元気よく行くぞぉ！！」

彰はそう言うと言葉の通り、元気よく歩き・・ではなく飛び出した。
それを後ろに奈津はため息をつく。

「やっぱり会いたくないなぁ・・。」

憂鬱だ。
そう思いながらも足は進み、とうとういつもの公園まで着いてしまった。するとそこにはいつも道理あの人が・・。

「！？来てくれたんだね。ありがとう。」

透は奈津に気づくと立ち上がり、こちらに近づいてきた。
とっとっ、透さんが私に、しかもキラキラの笑顔で！！やばい、鼻血出るかも・・。
そう思いながらもなるべく平静を保って奈津は答える。

「いっ、いえ。あの、透さんにお礼を言われることじゃありませんし・・。」

「・・・あれっ？僕、自分の名前言ったっけ？」

透は身に覚えのないことにきょとんとした顔をした。
かっ、かわいい。・・って見惚れるんじゃなくて！！

「あの、二人の会話を、近くでたまたま聞いて！」

慌ててそう答えると、透は納得したように

「そっか。それなら納得だ。」

そう笑顔で返してくれた。その言葉にホッとする。

「あっ、ベンチに座ろうか。」

二人は移動してベンチに座った。

「じゃあ、もう名前知ってはいるだろうけど、改めて自己紹介。僕は雪村（ゆきむら）　透（とおる）。大学二年生。」

やばいっ、いやいや来たものの・・こんな特典がついてるなんて！！

そう興奮しながらも奈津も自己紹介する。

「あっ、私は片桐（かたぎり）　奈津（なつ）です。よっ、よろしくお願いします！！あっ、高校二年です！！」

とっ、透さんとしゃべってるー！！

そう思うと緊張で心臓がばくばくしてくる。そのため、本人は平静を完璧に装っていると思っているが、さっきから力んだ言い方で返していた。それを知ってか知らずか、透も少し可笑しそうな顔で話を続けた。

「よろしくね。あっ、ちなみにいつも僕が待っているあの人は一枝（いちえだ）遥（はる）。同じ大学二年で、僕の幼馴染なんだ。」

幼馴染・・。

「幼馴染なのに性格はこんなにも正反対なんだぁ。」

思わず聞こえないようにそう小さくつぶやく。

「うん、よく言われる。似てる部分もあるんだけどねぇ。」

聞こえないようにつぶやいたはずが、彼にとっては丸聞声だったらしい。いつものこととでも言うように普通に答えた。

「わわわ、すみません。初対面なのに失礼なこと。」

「ううん。いつも言われることだから。」

そう答えてもらえてホッとし、思わず笑顔を返す。それから少しの間たわいのない会話をする。

そうして会話をし始めて、ちょっと慣れてきたなと奈津が思い出したとき、透は時計をふと見ると、突然とんでもないことを言い出した。

「奈津ちゃん、そろそろ時間だから行くね。」

「・・へっ？」

奈津の頭の上に？が思わず浮かぶ。

「本当は二人の仲直り見たかったんだけど、今日どうしてもはずせない用事が出来てしまって。遥、もうすぐ来ると思うから。ごめんね。」

そう言いながら立ち上がり、

「じゃあ頑張って。バイバイ。」

眩しい笑顔を奈津に見せながら帰って行ってしまった。

ちょっと待って！！うっ、うっ・・

「ウソでしょーーー！！！！？？？？」

そして今日2

どうしよう！二人きりは嫌だ！！気まずい！！
さっきまでの幸せな気持ちは一気に冷め、緊張と憂鬱が戻ってくる。

「よしっ、帰ろう！」

奈津は体を反転させ、出口の方に向ける。
すると彰が前にはばかり、通れないように手を広げ立っていた。

「だめだよ！ちゃんと約束果たしてくれないと。」
「分かってるけど・・やっぱり今日は無理！！」

そう言うと、そのまま通り抜けようとした。ぶつかるかと思ったが、透は幽霊なため、奈津はまっすぐ通り抜けることが出来た。
あの人が来るまでに早くここを出ないと。奈津は早足にそのまま歩き続けようと足を進めようとする。

が、なぜか動かない。いや、動けない。
どうして？
そう思っていると、透がニコニコと笑いながら、奈津の両肩に手を置いていた。

「もしかして・・。」
「そう！これがよく聞く金縛り！俺が生きてる人間に触れると効果覿面なのさっ。」
「そんなもんいらんわ！って思わず関西弁になちゃったし。早くやめてよ！」

「やだ。」
「もー！・・せめてこの体勢だけでも直させてよ。」
「やだ。そう言って逃げる気でしょ。」
「うっ。そっ、そんなことないし！」

そんなやり取りを二人で繰り広げていると、

「・・・・・・・何、やってんの？」

別の声が聞こえてきた。それが誰なのか確認せず、勢いのまま奈津は答える。

「何って金縛りを解こうと・・わっ！」

が、答えると同時に金縛りが突然解けた。そのため、ずっと抵抗をしていた体が突然解放されたことにより、こけた。

「いったぁ・・。」
「ほらっ。」

奈津が声のする方へ視線を向けるとその人は、奈津に手を差し伸べていた。さらに視線を上に上げる。

そう、その人物は顔を横に背けた一枝　遥だった。

そして今日3

遥は一向にこちらを見ない。それに顔がほんのり赤い気もする。もしかして・・・、

「風邪？」

奈津は思ったままの答えを口にした。すると遥は、顔は背けたままの仏頂面で、

「そんなわけないだろ。そんなことより、早く立てよ。・・・パンツ丸見え。」

「えっ！？」

こけた拍子に体操座りのような体勢で座っていたため、正面からは見える形になっていた。

一気に顔が熱くなる。

「きゃー！見ないでよ変態！」

「誰が変態だよ！自分がそんな座り方するからだろ！」

「だからって見ることないじゃない！」

「だから顔ちゃんと顔背けてただろ！」

「ーーーーっ。」

確かに。思わず納得してしまい、奈津は何も言えなくなってしまった。

「ほらっ、制服もっと汚れるぞ。」

そう言うと遥はもう一度手を差し伸べてくれた。そのぶっきらぼうな優しさを感じて、今度は素直に彼の手を取り、立ち上がった。

「ありがとう。」

奈津は小さくお礼を言った。すると遥はその声を聞き取り、素直に答えてくれた。

「いや。・・俺の方がありがとう。昨日の今日なのに来てくれて。それと、ごめん。昨日は言い過ぎた。」

「・・うん。」

彰君や、透さんが言っていた通り、本当は良い人なんだな。

奈津はその言葉を聞いてそう思った。

「そういえば、さっきのあれ、何？一人芝居？あれはやばいと思うよ。もうちょっと場所を選ばないとかなりの変人に・・グハッ。」

奈津は気がつけば笑顔で拳がみぞおちに決めていた。

前・言・撤・回☆

やっぱり嫌な奴！！

「んなわけないでしょ！どうして私がわざわざ一人芝居しなくちゃならないのよ！幽霊になったあなたの弟としゃべってたの！」

「弟？」

「そう！あなたに言いたいことがあるって、私に頼んできたんだか

ら。どうして私にだけ見えるのかは分からないんだけど。」
「弟って俺の？」
「あたりまえじゃない。」
「俺、弟なんていないけど。」

一瞬、奈津の思考回路が止まる。

「は？」
「だから、俺には弟なんていないんだって。」

はぁーーー！！！！？？？？

そして今日４

遥が帰った後、しばらく奈津と彰は黙ったままの状態で時間がただただ過ぎていった。

遥には弟なんていない・・どういうこと？
彰が私を騙していた？
それとも遥さんが嘘をついてる？
何が嘘で本当なのか分からないから、下手に声かけれないよ。

奈津は黙っている時間の中、彰にどう話しかけたら良いのかずっと考えていた。
その間、彰はずっと背中を向けたままなので、表情が分からない。

「・・・あのさ、」

そんな沈黙の中、話しかけたのは彰からだった。

「兄ちゃん、俺のこと忘れちゃったのかな？」

彰は何でもないという風に背中を向けたまま、おどけて言った。

「まぁ、もう俺が死んで半年は経ってるだろうしさっ、兄ちゃんモテるから美人な彼女出来て楽しく毎日を過ごしてるのかも。」

「あきっ・・」

「でも、」

奈津が声をかけようとした瞬間、おどけたままのその声はだんだん震えていく。

「この半年間、話しかけても誰も聞こえていなくて。見えなくて。・・・やっと、やっと俺のこと見える人に会えて、兄ちゃんに言えると思ったのに。」

「彰君・・・。」

「ごめん。しばらく一人にして・・。」

そう言うと、彰はスッと姿を消してしまった。

「彰・・君・・。」

誰にも届くことのなくなったその声は、寂しく空に溶けていった。

彰がいなくなって

あの日以来、彰は姿を消したまま、三日が経った。

「はぁー・・。」

どこに行っちゃったんだろう？やっぱり傷ついちゃったよね。私はどうしたら・・・。

「どうしたの？」

「・・・理紗。」

振り向くとクラスメイトであり、一番の友達である理紗(りさ)が心配した顔で奈津を見ていた。

「この三日、ため息ばっかりだよ？」

「うん・・ちょっとね。」

「なにぃ？この親友である理紗様に言えないことがあるというのかぁ？」

理紗は少しおどけたように言った。

ううーん・・言いたいけれど、でも幽霊なんか信じてもらえるのか・・・

「ううーん・・言いたいけれど、でも幽霊なんか信じてもらえるのか・・だって、毎日私の王子様に会いに行っていたら突然幽霊の男の子が現れて、頼まれ事をされて、でも言わなくちゃいけない相手

は超ーーーーーーーーーーーー嫌な奴で、でもそいつは弟のこと忘れてて、そしたら弟は姿消しちゃってわーーー！！！みたいなんて言えないよ！！！」

「いや、めっちゃ言ってるし。」

「・・・えっ？」

奈津は心の声をそのまま声に出して理紗に話してしまっていた。

「でも色々話がむちゃくちゃになってたから、もう一回整理しながら話して。なにか役にたてるかもだし。ねっ？」

「う、うん。」

こうして奈津は自分の頭の中を整理しながら、もう一度話し始めた。

どうしたら良い？

事情を話し始めてから２０分後・・・

「なんか、ドッキリって疑いたくなるね。・・ごめん、ごめん。冗談だよ。」

「まぁ、疑いたくなる気持ちはわかるけどね。」

そう言って、奈津は苦い顔をした。

「でも、遥さんって人、どうして彰君のこと知らないって言ったんだろう？」

「うーん・・マンガとかの展開的に記憶喪失とか？」

「それとも彰君の方が嘘をついてる？」

「いや、それはないよ。・・と信じたい。」

だって、あの震えた声、無理に出した痛々しい笑顔。出会ってたった2日なのに、彰君がいなくなってからずっと頭から離れない。私は、どうしたら良い？

そのまま奈津は黙り込んで考えていた。

すると理紗は、奈津の顔を見て言った。

「ねぇ、奈津はもうどうしたら良いのか分かってるんじゃない？」

「えっ？」

意味が分からなかった。どうしたら良いのか分からないのに、どう

したら良いのか分かってる？

「どうしてそう思うの？分からないから相談してるのに。」

思わずそう訊き返す。

「だって、奈津の顔は、透君を助けたいって思いっきり書いてるよ？私は3人には会ったことないから、どっちが嘘をついてるとか、誰を信じたら良いのとか分からないよ。でもいつも一緒にいる奈津のことなら何でも分かってるつもり。」

「・・・・。」

「・・・・。」

「・・・・。」

「・・・・違った？」

「・・・・ううん。ううん！！」

奈津は思わず理紗の手をガシッと掴み、目を輝かせた。

「ありがとう！そうだよね。助けたいって気持ちが一番大切だよね。私が悩んでちゃダメなんだ。」

何も言わない奈津に少し不安になっていた理紗はその言葉を聞いて、ホッと思わず息をついた。

「よかった。」

「本当にありがとね。さすが私の親友！」

「でしょ？」

よしっ。このまま何もしないで変わらないのなら、私が変えてやる。良い方向にいくかもしれないし、もっと悪い方向にいくかもしれな

い。でも、このままじゃ苦しい気持ちのままだもん。

奈津は思いを固めた。

早く会いたい

放課後のチャイムがなる。
その音が始まると同時に奈津は鞄を手に持ち、すぐさま教室を飛び出した。

「こらっ、片桐！まだホームルーム終わってないぞ！」

その瞬間、先生の声が飛ぶ。

「すみません、先生！今日だけ見逃してくださーい！」

早く。早く会いたい。きっと、ううん、絶対あそこにいるはずだから。

一刻も早く行きたかった奈津は先生に向って叫びながら走り、次に先生が叫ぼうとした瞬間にはすでに姿はなかった。

「はぁ、全く。」

すでに誰もいなくなった廊下を少し見つめた後、軽くため息をつき教室に向き直る。

「ほら、ホームルーム始めるぞー。」

そのまま何事もなかったのように先生はホームルームを始めた。
その話を頭の上で聞きながら、理紗は心の中で笑顔で『頑張れ！』と祈っていた。グラウンドを走る奈津を見つめながら。

やっと再会

ハァ、ハァ。。。

学校を飛び出してから15分。その間も奈津はずっと走り続けた。この1ヵ月間、王子様こと透に会いたくて毎日この道を走っていた。なのに今日はなんだか長く感じる。

もうちょっとで着く！というところまで差し掛かった。

そうすると奈津はラストスパートをかけた。

辿り着く前にある林の中に入った途端、周りの空気も変わる。空気が澄みわたり、涼しくもなる。それを感じたことに奈津が気付いた時にはすでに公園に着いたあとだった。

「奈津ちゃん！？」

全速力で走ってきた奈津に驚いて、いつものようにこの公園で読書をしていた透は慌てて近づいてきた。

「そんなに全力で走ってきてどうしたの！？」

「ハァ、ハァ。。。透、さん。ごめ・・なさい。・・耳・・・塞いで・・！」

「えっ？」

奈津は途切れ途切れに答えるとそのまま、息を整え、そのまま大きく息を吐いて、吸って、

叫んだ。

「彰ーーーー！！！！！！！いるんでしょ！！！早く出てきなさーーーーーーい！！！！！！！！！」

この公園と林内には確実に響きわたっただろう。現に隣にいる透は目を白黒させていた。しかし、奈津の叫びはまだ続く。

「あんたねぇ、なんのためにこの世界に留まってるのよ！！伝えたいことがあるからなんでしょ！？その覚悟があるのに今更逃げてるんじゃないわよ！！」

「奈津・・ちゃん！？」

「それに私まで巻き込んどいて、突然放置ってどういうことよ！！巻き込むなら最後まで責任とって巻き込んでよ！！私・・・私、あんたを助けたいんだからぁ！！！！！」

最後の方は少し涙目になっていた。
けれど、どうしても伝えたかった。どこにいるのか姿も見えない彼に。

すると、空からすすり泣く声が聞こえてきた。奈津は思わず声のする方を見渡す。そうすると、ある一点だけ空の色が見えなくなり、何かの形に変わっていく部分があった。その形は透けているが、しっかりと男の子の形に変わっていく。

そう、彰だった。

視線が合い、しばらく見つめあう形になる。お互い涙目だ。
すると、彰が声を発した。

「何、でっかい声で叫んでるんだよ。」
「あんたが・・彰が出て来ないからでしょ。」

「何・・泣いてるんだよ・・。」
「彰こそ・・泣いてるじゃない。」

二人はお互いの涙を拭おうと手を伸ばした。しかし、奈津は生きている人間。彰は死んでしまった人間。気持ちとは裏腹に、お互いの手は体をすり抜けていく。

「・・・。」

彰はそのことを再確認して、少し顔が歪んだ。
その様子に気づいたのか気付いてないのか分からないが、奈津は言った。

「小学生のお子様が、女性の涙を拭うなんてまだ早いって証拠よ。」

彰はハッと奈津を見る。
奈津はおどけた顔を見せていた。
すると彰は、

「・・フッ。もうおばさんのクセしてよく言う。」
「なっ、失礼な!?私はまだ花の女子高生よ!」
「花のとか言うあたりおばさんなんだよ。」

思わず笑ってしまっていた。

やっと、顔を見せて、笑ってくれたね。

奈津は心の中でホッと胸をなでおろした。

忘れてた

「えっと・・・。」

奈津は忘れていた。

「さぁ、今度は逃げ出さずに頑張るよ。」

「おぅ。」

「奈津・・ちゃん？」

透の存在を。

「おーい！」

「・・えっ？」

やっと声に気づき、思わず振り向くと、苦笑した透が立っていた。

「あ・・・。」

「もしかして、忘れられてた？」

「えっ！？いや、その、えっと・・・。」

「・・・。」

「ごっごめんなさい！」

奈津は言い訳も思いつかず、素直に謝ることにした。

すると透は一つ息を吐くと、

「いいよ。大事なことだったんでしょ？」

「・・はい。私にとってはとても。」
「うん。じゃあ許すよ。」
と答え、いつものキラキラの笑顔を返してくれた。
「あ、ありがとうございます。」
わわわ！3日ぶりに見る透さんの笑顔、眩しすぎるよぉぉぉ！
奈津は思わず眩しさと幸せさで目を細める。
しかし、そんな思いも束の間。奈津にふとある考えが浮かぶ。
んっ？
ちょっと待って。透さんはずっとここに居たんだよね。私と彰の会話を聞いていた。・・ずっと？しかも彰は幽霊・・・・・・・・・・・・ってことは、
「透さん・・さっきまでの私の会話・・。」
「うん。もちろんぜんぶ聞いてたよ。」
「私の・・・声・・だけ？」
「うん。迫真の演技。」
やっぱりいいいいいいいい！！！！！？？？？？？私、絶対変な子だって思われちゃったよねぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！？？？？？？・・・・・・・・・ショックだ・・・・・・・・・。
思わずうなだれる。
しかし、その様子を真っ直ぐみたまま透は言葉を続ける。
「でも、違うんだよね？」

「・・・えっ？」
「誰かここにもう一人いるんでしょ？僕には見えないけれど。」
「・・どうして・・。」
優しい笑顔を浮かべて透は答える。
「だって、奈津ちゃんは演技や嘘がつけないでしょ？この間、初めてたくさん話したとき思ってた。それにさっき謝ってくれたことで確信に変わったしね。」
うれしい。こんな風に私を見ていてくれていたなんて。
素直にそう思った。
奈津は胸が暖かくなるのを感じ、彰の方を向き小声で言った。
「ねぇ、彰。」
「何？」
「・・透さんになら、彰のこと、言っても良いかな・・？」
「あぁ。透兄ちゃんなら、許してやる。」
「なに、その上から目線。」
思わずクスリと笑う。
「ありがとう。」
奈津は彰にお礼を言うと、透に向き直り、
「・・透さん。聞いてほしいことがあるんです。」
「？」
「・・・良い、ですか？」

「うん、もちろん。」

ゆっくりと自分と彰の出会いのことを話し始めた。

再び説明

二人はベンチに座り、ゆっくりと奈津は説明を始める。

どれくらい時間がたったのだろう。いや、実際にはそこまで時間は経っていないのであろう。現に遥が来ていないことが何よりの証拠である。

しかし奈津の頭の中は、透に言い忘れがないよう普段使わない頭の中をフル回転させながら、説明していった。

まぁ、学校の昼休みにも一度理紗に説明しているのだが。

「・・・というわけなんです。」

奈津は一通り説明を終えると、それまでずっと黙って聞いていた透の方を横目で不安げに見た。

『私が話しているのは一枝　遥の弟で、頼まれごとをされているんです。』

改めてそのことを実感すると、やはり説明されても信じづらいよなぁ。と自分でつくづく思う。

透が黙っている間、そんなことをグルグルと同じことを考える。すると、

「あのさ、」

「はっ、はい！！」

沈黙の間、マイナス思考のエンドレスに入り始めていた奈津は、突然の声に思わず驚き、立ち上がる。

そんな奈津の行動に、透も思わず驚く。しかしすぐに可笑しそうに笑い、言葉を続けた。

「明日もここに来てくれるかな？」

「えっ、はい。もちろんですけど・・？」

「よかった。じゃあ、明日は僕と病院に行こう。」

マイナス思考が現実化した瞬間である。

そんなときに、タイミングが良いのか悪いのか遥が病院側からやってくる。

「なに、どうしたの？」

思わずショックで固まっている奈津を横目で見ながら透に話しかける。

「ううん。なんでもないよ。」

透は何事もなかったかのように笑顔で答えた。

「ふーん？」

「何、遥、ヤキモチ？」

「ち、違うし！！こんなブス！！」

この言葉で固まっていた奈津が思わず反応する。

「なんですって！？」

「本当のこと言っただけだろ。」

二人は顔を見合わせると火花を散らし始めた。そんな二人を少し見

た後、あきれた様子で止めた。

「ほらほら、日も暮れるし帰るよ。」
「あっ、あぁ。」
「じゃあ、また明日ね。なっちゃん。」
「「えっ。」」

『なっちゃん』という言葉に思わず二人は反応する。
そんな様子を知ってか知らずか、透は遥の背中を押しながら公園を去っていった。

「・・・。」

奈津の心は、トキメキと明日への不安で混じりあっていた。

帰り道（遥と透）

「いつから『なっちゃん』呼びなんだよ？」

公園を出てから少しして、遥が透に話しかけた。
その質問を聞いた透は一瞬きょとんとした表情をしたあと、すぐに少し意地悪な顔をして答える。

「やっぱりヤキモチ？」
「ち、違うし！あいつは・・」

そう答えながら遥は少し足早になり、顔の表情が見えないまま言葉を続ける。

「あいつは・・よく分からない。」
「よく分からない？」

思わず遥の言葉を繰り返す。さらにどういうことなのか聞こうと口を開きかけると、

「それより、さっきの質問にちゃんと答えろよ。」

と、透の方に顔だけ向けてもう一度聞いてきた。

「よっぽど気になるんだね。」
「い、いや、そういうわけじゃ・・」

どもりながら話す遥に、意地悪顔をもう一度浮かべる。しかし今度

は素直に答えた。

「遥が聞いた時からだよ。」

「えっ。」

「『奈津ちゃん』より『なっちゃん』のが呼びやすいでしょ？本人に聞かずにいきなり呼んだから、彼女もびっくりしたみたいだけどね。」

その言葉を聞いた遥は、思わず透に気づかれぬよう安堵のため息をついた。

しかしそれもお見通しだったため、すかさず透はつっこむ。

「遥ってやっぱり分かりやすいよね。」

笑顔で遥を見てくる透に、遥は耐えられなくなり、

「うるせぇよ。」

そう言うと全速力で走りだした。

「あっ、遥待ってよ！」

走りだした遥に、少し嬉しそうな顔をしながら透は後を追い、二人は家に帰って行った。

帰り道（奈津と彰）

「なっ、なっちゃん・・！？」

透さんに『なっちゃん』って呼ばれちゃったよ！！

奈津は思わず赤面する。

しかし、それもすぐに先ほどの透の言葉を思い出す。

『明日、病院に行こう。』

透は本当は奈津の言葉を信じていなかった？

思わずその言葉が頭の中によぎる。奈津はそう思うと顔を曇らせた。

「違ったのかなぁ・・。」

「お前ってほんっと表情コロコロ変わるなぁ。」

奈津が悩んでいると、それをずっと見ていた彰が感心そうに話しかけた。

「はっ？」

考えていることと全く違うことを言われたため、思考が追い付かずキョトンとした顔をする。

その顔を見て、彰は今度笑いだした。

「やっぱり面白れぇ。」

「そ、そうかななぁ？・・・ってか年上のお姉さまに『お前』なん

て言わないの！」
「お姉さまって柄じゃないだろ。」
「いや、違うけど・・あぁ！？自分で認めちゃった！？」
さらに彰は笑う。としばらくこの言い合いが続くと思いきや、突然思い出したのか真顔になって言った。
「あっ、俺、明日病院について行かないから。」
「えっ！？どうして！？」
そのままのノリで奈津はそのまま叫ぶ。
その一方で彰は冷静に答える。
「いや、なんとなく。」
「なんとなくって・・。まぁ良いか。じゃあもう暗くなってきたし、帰ろっか。」
「うん、帰ろう帰ろう。」
なぜ彰がそう言ったのかは分からないが、あえてその理由は聞かず、二人は家に向かい歩きだした。

病院

次の日、奈津は病院の前に立っていた。

「き、来てしまったけれど・・・。」

不安な顔をしながら病院を見上げる。
その視線をゆっくりと下におろしていくと、病院の中から透が出てくるのが見えた。
透は奈津と目が合うと、いつもの優しい顔で微笑む。
奈津はその笑顔に思わず胸がときめく。まぁいつものことだが。

「暑い中来てくれてありがとう。」
「い、いえ、全然。」

な、なんか傍から私たち、恋人同士に見えるかも!?

この二言会話を交わしただけで奈津の妄想が広がろうとしていた。
が、それはあっさり終わりを告げる。

「じゃあ病院の中に入ろうか。」

そうだったぁぁぁぁ!私今から病院で検査受けるんだったぁぁぁぁぁ!!

奈津は現実に意識が戻る。先ほどとは違う心臓の音が体全体に鳴り響く。
それを感じながらも、一歩一歩透の後を着いていく。

逃げちゃダメだ。ちゃんと着いて行かないと。
このまま着いて行かず、逃げることも出来ただろう。
透は奈津の言葉を信じず、精神科で見てもらおうとしているのかもしれない。
確かに現実離れした話だ。
しかし、奈津は信じたかった。
話を真剣に聞いてくれたあの顔を。
『信じるよ』と言ってくれたあの言葉を。

「こっちだよ。」

ときどき奈津がちゃんと着いてきているか振り向きながら、透は歩いて行く。
上へ上へと。

・・・・んっ？上？
緊張していた頭の中に疑問が生じる。

「あの、透さん。どうして上へ？検診の受付なら一階なのに・・・。」

おかしい。素直に質問すると、

「シーッ。」

透は人差し指を口元に当て小声で答える。

「ここからは静かにね。」

その答えと共に、透は一つの扉を開けた。
上へ上へと上った先は屋上。
真っ青な快晴。その眩しい光の中に目を凝らす。
その光の先にいたのは遥だった。

公園への帰り道

「えっ、遥さん・・？」

奈津は思わず声を漏らす。

すると、透は慌てて扉を閉めた。そして小声で、

「ダメじゃないか。遥にばれるでしょ。」

と奈津を注意する。

「ご、ごめんなさい。」

奈津はなぜばれてはいけなかったのか分からなかったが、とりあえず謝った。

透はすぐに笑顔に戻り、

「このままいつもの公園に戻ろうか。」

そう言うとそのまま上ってきたばかりの階段を、あまり足音をたてないようにしながら降りていった。

奈津は色々と疑問を隠せないといった様子。だがこのままここに立ったままも意味がないと思い、透の後を追いかけた。足音は一応気にしながら。

二人はそのまま病院を出て公園に向かおうとした。
その途中、公園に着くまでに並木道がある。二人はゆっくりと会話もなく歩いていた。
今は7月。大分暑さが増してきた頃だが、左右にある青々とした木々が風に揺れ、通り行く人達を優しく癒していく。ほかとは違う空間にいるようであった。
三分の一ほど進んだ頃、透は突然歩くのを止め、前を向いたまま奈津に話しかけた。

「なっちゃん。今って近くに彰いるのかな？」

透の少し後ろを歩いていた奈津は、突然足を止めたことに少し驚きながらも質問に答える。

「いえ、病院には着いて行かないって言っていたので今は居ませんけれど・・・。」
「そっか。」

そう言うと、透はゆっくりと体ごと奈津の方に向き直る。そしてどこか苦しそうな笑みを浮かべ、こう言った。

「あのね、遥は彰のことを、ちゃんと覚えてるんだよ。」
「えっ・・」

意外な言葉に言葉を詰まらせる。
二人の間に、ピンッと張りつめた空気が流れた。

「彰が知る前に、聞いてくれるかな？」

そう言うと、奈津は緊張した面持ちで、しかし透をしっかりと見つめたままうなずいた。

透はそれを確認すると、そのまま視線をはずし静かに話し始めた。

一年前のあの日

「一年前のちょうどこの時期。あの日はとても暑い日だった。彰は突然車に轢かれたんだ。遥の目の前で。くわしい状況は分からない。けれど、あの日の夜会った遥はーーーー」

『遥！！』

あの日、僕は混乱した遥から突然電話をもらい、夕方慌ててこの病院に向かった。

病院の入口が見え始めたと同時に、入口の隣にある柱の前で丸くうずくまって座っている遥が見える。

僕は目の前に着くと息を切らしながら聞いた。

『遥っ！彰は！？』

すると遥は小さく、震えた声で答えた。

『今・・手術・・・して』

いつも元気で、頼りになる遥。そんな彼がこんなにも震えている。

そっと肩に手を置くと、その震えがより一層感じ取れた。

『・・透・・どうしよう・・俺のせいだ。俺のせいで彰が！！』

『今はそんなこと言っちゃいけないよ！！彰・・今頑張って生きようとしているんだから！！』

遥の気弱な発言に思わず怒ってしまう。

『・・・ごめん。』

『・・・うん。』

その会話を交わした後、僕たちは一言も言葉を交わさないまま病院の中へと入って行った。

彰が手術中だという扉の前に近づくと、ベンチに座っている遥のおじさん・おばさんがいた。

おばさんは顔を手で覆い隠して表情ははっきりとは分からない。しかし遥と同様、震えているのは分かった。そんなおばさんの傍で、おじさんはそっとおばさんに寄り添っていた。

『おじさん、おばさん・・・。』

おじさんは僕たちに気づくと顔を上げ、無理やり微笑みを作った。

『透君も来てくれたんだね。・・ありがとう。』

しかし、そう言うとすぐにその微笑みも消え、また沈黙が広がった。

僕は手術の間、彰が死ぬはずがない。ケロッと笑いながら出てくるんだと自分に言い聞かせ続けた。

どれくらい経ったのだろう。とても、とても長く感じられた。
まだなのかと手術中の赤いランプを何十回目と見たとき、灯りが消えた。
思わず全員が立ち上がる。
息を呑んで待っていると、ゆっくりと主治医が出てきた。

『彰！・・・彰は！？』

おばさん達はすぐさま主治医の元へ駆け寄り聞いた。一斉に注目を浴びる。
主治医は少し息をため込むと、その場にいる全員に聞こえる声で答えた。

『残念ながらーーーーー』

その日の夏の夜、一枝　彰は亡くなった。

一年前のあの日2

「ああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

雄叫びに似た悲痛な声が広がる。おばさんの声だ。隣に座っているおじさんも声を声を押し殺し泣いていた。僕は今の状況が信じられず、そのため涙も出なかった。その場をテレビ画面から見ているような、そんな感覚だ。

ふと、後ろにいたはずの遥がいないことに気がついた。廊下の奥へと視線を移動させると、遥が足元をふらつかせながら歩いている姿が見える。僕はその様子が気にになり、遥の後を追った。

遥の後を着いて行くと、屋上に着く。遥は真っ暗な空を、ただ静かに眺めていた。

「遥……」

僕が声をかけると、遥は一瞬肩を震わせた後こちらにゆっくりと顔を向ける。

「あれっ、透なんでこんなところにいるの？」

「えっ……」

言葉に詰まった。あまりにも今の状況には不釣り合いな遥の明るい声。なんと答えたら良いのか分からなかった。すると、

「まぁいいや。なんかさ、彰と遊んでたんだけど、あいつ居なくな

っちゃってさぁ。迷子にでもなったのか？透知らない？」

と話を続ける。

「遥、何冗談……言ってるの？」

僕は様子の可笑しい遥に問いかけた。少し声が震えているのに自分で気づく。

「冗談？俺は大まじめだけど？」

遥はそう言うと、普段と変わらない声で笑い出した。下でどうしようもなく泣いている遥と彰のおじさん・おばさん。上で、今ここで起きたことが何もなかったような顔で笑う遥。この不思議な状況。ようやく僕は理解した。

彰は『死んだ』んだ。

頭が理解したと同時に、僕の方に涙が頬につたいはじめた。

「透！？どうしたんだ！？」

遥は僕がいきなり泣き出したことに驚いている様子だ。しかし僕は、こんな遥が許せないのと、そんな遥を見てやっと『死』を理解した自分が腹正しく、

「……バ……カ……やろ……」

と声を洩らすのが精一杯であった。

一年前のあの日3

しばらく経った頃、僕はようやくおさまり始めた涙を拭き、おじさん・おばさんの元へ戻ることにした。遥に「ここから動いちゃダメだよ」と忠告してから。本人はその注意の仕方に少しムッとしているようだったが、素直にその場に座り込んでいた。

「透君。遥は……？」

戻ると、おじさんにそう聞かれた。僕は視線を少し下に向けて先ほどの遥の状態を伝えた。

「そうか……」

おじさんがそうつぶやくと、先ほど手術を担当した医者がこちらに歩いてきた。

「一枝さん、お話することがありますので、来ていただいてもよろしいでしょうか？」

その言葉を聞くと、「はい」と返事をし、立ち上がる。そして、

「少しここで待っていてね」

と言うと二人はそのまま医者の後に着いて行った。

話が終わる頃、時計の針は夜中の１１時を過ぎようとしていた。

結局、遥は今日一晩僕の家に泊まることになった。医者に診てもら

ったところ、『一過性全健忘』の可能性が高いと診断された。一種の『記憶喪失』だ。２４時間以内に回復することが多いため、一旦様子を見ることになったのだ。しかしこの状況のため、今日一晩だけおじさん達と遥、お互いのためにこちらに泊まることになったのだ。

「えっ、俺そっちに泊まるの？」

遥は脳の理解がなかなか届かないのか、何度か同じ質問を繰り返していた。

一年前のあの日４

僕は浅い眠りにつきながらも、彰のことが頭から離れず気がつくと時計の針は朝の５時を指していた。僕はこれ以上眠ることは出来ないなと思い、起きることに決める。ベッドから起き上がり、そのまま降りようと体を横に向ける。すると違和感を感じた。
隣の床の布団で寝ていたはずの遥が居ないのだ。
昨日は確かに隣で寝ていたはずなのに。僕はベッドから降りると家の中をぐるりと探した。
しかし遥はいない。
もしかしたら記憶が戻って家に戻ったのかもしれない。
そう思い、僕は葬式に参列するために制服を着て（当時は高校生）遥の家に向かうことにした。昨日はお通夜だったから、おじさん達も起きているだろうと思いながら。

遥の家の前に着くと、腕時計の針は５時３０分を指していた。僕は朝が早いのと近所迷惑にならないよう、あまり響かないようそっとインターフォンを押した。そうしても意味がないのは分かってはいたがなんとなく。
しばらくするとおばさんの声がインターフォンから聞こえる。

『はい、どちら様でしょうか？』
「あっ、透です」
『ちょっと待ってね』

声が途切れるとドアの開く音が聞こえた。同時におばさんの姿も見えた。おばさんの目の下は、昨日何度も泣いたのであろう、何度も拭った跡が残っていた。

「朝早くにすみません」
「いいのよ。わざわざ来てくれてありがとうね」
「いえ」
「遥は……まだ記憶、戻っていないのかしら……？」
そう言いながらおばさんは僕が今来た道に目線を向けた。
「えっ、遥戻ってきていないんですか？」
「来ていないけれど……」
おばさんは困惑した顔をしていた。それはそうだ。僕だって困惑する。けれどこれ以上心配させてはいけないと思いなおし、僕は慌てて
「おかしいなぁ、どこかで道草してるのかな？僕、遥を探して来ますね。始まるまでには戻ってくるので」
となるべく明るい声を出して言った。すると、
「いつもごめんねぇ」
とすまなそうな声で謝ってくれた。
「そんな。じゃあまた来ますね」
そう言って後ろを向き、僕は歩きだす。
そして背中越しにドアが閉まるのを確認すると、どこにいるのか分からない遥を僕は全速力で走って探し始めた。

一年前のあの日5

学校、公園、本屋やゲームセンター……。思い当たる場所をくまなく探すが、遥は見つからなかった。

「一体、どこにいるんだ」

気がつけば、日は傾き夜へと近づいていた。早くしないとお通夜が始まる。僕は立ち止まり、焦りながらももう一度遥が行きそうな場所を考えた。

やっと息が整いだした頃、ふと、昨日の後悔に満ちた遥の顔を思い出した。

「まさか……」

確かにあそこにはまだ探しに行ってはいない。走りすぎて痛む脇腹を少しさすると、僕はもう一度走り始めた。

15分後、僕は病院の前に立っていた。日はまだ僕達を赤く染めている。上を見上げたあと、すぐに目線を前へと戻し、屋上へと向かった。上に上がるにつれて人と出会う回数も減ってくる。それと比例するかのように、階段の駆け上がる靴の音が大きく響き渡っていった。

僕は上まで辿り着くと、一旦足を止め、一呼吸置いてから屋上へ続く扉を開けた。

そこにはやっと探し続けていた遥がいた。
遥は屋上のフェンスを越え、空を見上げ座っていた。僕がフェンスまで近づくと、遥は気配に気が付き顔だけこちらに向けた。
「透、どうして……」
「どうして、じゃないだろ。みんな心配してる」
僕はそう言いながらフェンスも越えようと足をかける。すると、
「来るな」
「えっ」
強い口調でそれを止められた。遥は顔を前へと戻し、言葉を続ける。
「もう帰れ。通夜も始まるだろ」
「！！記憶、戻ったの！？」
「……あぁ」
そう言ったっきり、遥は黙り込んでしまった。その上ここからだと表情さえ分からない。僕は1つのことを頭によぎる。
「……自殺、するの？」

一年前のあの日6

「……俺は、とりかえしのつかないことをした」

遥は空を見つめたまま答え、ゆっくりと立ち上がった。

「そんなのずるいよ」

僕はとっさに言い返す。

「分かってる」

「じゃあ、どうして———」

「分かってるけど、逃げたいんだ!!」

遥は叫んだ瞬間こちらを振り返った。ゆっくりと涙が頬を撫で、地面へと落ちていく。悔しくて、後悔に満ちた顔が、僕の胸に突き刺さる。

「俺は……俺は彰を死なせた。生きる資格なんてない。生きて一生かけて償うのなら、死んで、死の世界の中で永遠に償い続けたい……俺は、俺はもう」

「ダメだ!!!」

力のある限り、僕は叫んだ。

「そんなのダメだ!!……遥が死ぬなら、僕も死ぬ!!!」

僕はそう叫ぶと遥が止める声も聞かず、フェンスを飛び越えた。そ

のまま遥の隣まで歩く。下を向けば、花壇の花が風で揺れているのが小さく見えた。思わず身震いをするが、今はそんなことを感じている暇ではない。

「いい？遥が死ぬことで、一気にもう一人増えるんだ。遥のせいでね」

「そんなこと出来るわけ――――」

「出来るよ。覚悟を決めたから、今隣に立っているんだ」

遥を死なすわけにはいかない。これ以上、おばさん達を悲しませるわけにはいかない。これ以上、大切な仲間を失いたくない。

「だから、僕のために死ぬな！！」

遥は、その場で泣き崩れた。声が出続けるかぎりずっと。

今に戻って透から

その後、どれぐらいたったのか分からないくらい二人で泣いた。太陽はそんな悲しみを抱きしめるようにして沈んでいった。

――――――ここまでが、一年前にあった出来事。その日から、遥は毎日この病院の屋上で、彰に懺悔をし続けている。僕は、遥が自殺をするなよっていう監視の意味も込めて、毎日あの公園で待っているんだ」

「……そんな、ことがあったんですね……」

奈津はそれ以上の言葉が出て来なかった。二人の苦しみが伝わり、のどが詰まった。と同時に、本当にこんな話を私が聞いてよかったんだろうかと疑問にも思った。

すると、再び透が声を出した。

「なっちゃんにね、このことを話したのは、お願いがあるからなんだ」

「お願い…ですか？」

透は真っ直ぐ奈津を見つめると、真剣な顔つきで言葉を続けた。

「遥に彰がいることを言わないでほしいんだ」

思わぬ言葉に奈津は思わず動揺する。

「えっ、どういう……」

「そのままの意味だよ」

表情を変えずに言葉を重ねられる。

「なぜですか？彰がいるってことが分かったら、遥さんはもう一度彰と話せるんですよ？」

納得がいかない奈津は急いで思考を働かせ反論する。

「だからだよ」

「えっ？」

「知ったらきっと遥は話したがる。けれど、彰は死んでいるんだ。もし彰が遥を責めたらどうなる？今度は間違いなく自殺する…そんなのはもういやなんだ」

透の悲痛な痛みが伝わってくる。しかし彰の痛みも奈津は知っている。

「彰は……彰はそんな子じゃないです」

両方の痛みを知り、涙がこぼれそうになる。

「分かってる。けれど幽霊が必ずしも同じ性格のままとは限らない」
「けど、それじゃあ……」
彰が辛いまま……その言葉が続かず、涙と共に消えた。
「なっちゃんが遥に近づくのは歓迎する。けれど、彰のことは言わないで」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2858p/

CHANGEの仕方

2011年11月2日02時11分発行